

子どもの体を守るため、今できること…

子宮頸がんを予防する ワクチン接種を考えよう

女性ならだれでもかかる可能性のある「子宮頸がん」。昨年12月、ワクチンが認可されたことが大きく報道されました。

しかし、いざワクチンを接種しようと思うと、疑問や不安があるはず。

そこで、かわむらこどもクリニック院長の川村和久先生に子宮頸がんとうちくちんについて聞きました。

**20〜30代の女性に多く発症する子宮頸がん
女性ならだれでも発症する可能性が**

日本での子宮頸がん年間発症数は約1万5000人、死亡者数は約3500人と推計されています。近年20〜30代の女性で多くなっている、20代および30代の女性において最も発症率が高いがんです。子宮頸がんは初期の段階では自覚症状がほとんどなく、従って不正出血や痛みなどの症状が現れた時には、かなり進行しているケースも少なくありません。しかし子宮頸がんは、検診でがんになる前の状態である前がん病変の段階で発見できれば、簡単な治療でほぼ100%完治します。その後の妊娠、出産にも影響はありません。

子宮頸がんは、ほぼ100%が発がん性HPV(ヒトパピローマウイルス)というウイルスの感染が原因です。発がん性HPVに感染しても、ほとんどの場合は一過性で、がんには移行せず体外に排出されます。しかし、まれに感染が長く続いた場合(持続感染)、前がん病変を経て一部が発がんとなる場合があります。性行動のある女性の約80%が一生涯一度は発がん性HPVに感染すると報告があるほど、発がん性HPVはごくありふれたウイルスであり、誰もが持っているウイルスといってもいいでしょう。ですから、子宮頸がんを発症した人は、複数のワクチン+検診で予防が可能な時代

接種のタイミングは11〜14歳、セクシャルデビュー前が目安に

**命を守る、自分の体を守る—
ワクチン接種を、母娘で話し合うきっかけに**

子宮頸がんワクチンは、10歳以上の女性が接種の対象となります。できればセクシャルデビュー前の接種が最も望ましいので、11歳〜14歳が最も接種に適した年齢といえます。

ワクチンは、小児科、内科、婦人科などの医療機関で接種できますが、お子さんでしたら通いなれた小児科が抵抗ないのではないのでしょうか。

ワクチンは初回接種、初回から1カ月後、初回接種から6カ月後の3回接種します。もちろん、性経験のある大人の女性でもワクチンの効果は十分ありますので、お子さんの接種にあわせ、お母さんが小児科と一緒に接種することも可能です。ただし、ワクチンは保険の適用はありませんので、任意接種となります。

実際ワクチンを接種するとすると、お子さんに「子宮頸がんとは?」「なぜ、今、接種するのか?」を説明することになります。その際どう話したらいいだろうと悩むお母さんも多いと思います。ワクチンに限ったことではありませんが、私が小学4年生を対象に行っている性教育では、まず、命の大切さ、自分の体を守ることを大切に伝えることが、心の準備にもなります。お母さん、自分と命はつながっていて、もし将来子どもを産みたいと思ったら、その体から大人の女性へ変化するところまで、子宮頸がんワクチン接種を一つのきっかけとして、お子さん、また子どもが大きくなったら話そう、ではなく、子どものころから折

子宮頸がんワクチンに関するアンケート

Q. あなたは子どもに子宮頸がんワクチンを受けさせたいですか?
YES **79.6%**
NO **19.9%**
すでに受けている... **3.5%**

Q. ワクチンのイメージは?
1位 子宮頸がんを予防できる画期的なもの
2位 任意接種なので費用がかかる
3位 ワクチンで自分の体を守る事ができる

2010年7月2日〜7日、小学4年生〜中学生の女の子のお母さんが回答。えるこみ調べ(n=286)



かわむらこどもクリニック院長・川村和久先生

杏林大学医学部卒業。国立小児病院、日立製作所日立総合病院などで新生児医療に従事し、1993年「かわむらこどもクリニック」開業。3年前から学校医活動として、小学4年生の性教育を担当。仙台小児科医会会長。宮城県小児科医会副会長。日本外来小児科学会理事

